



Center for Neurodevelopmental Studies, Incの紹介

長崎大学医療技術短期大学部 土田 玲子

日本と異なり個人でClinicを開くOTもそう珍しくない。こ
こアメリカでも、Center for Neurodevelopmental
Studies - C. N. S. - (神経発達研究所)の仕事はひととき
異彩を放っています。現在当研究所の名誉所長であるLorna
Jean Kingと、副所長Rolinda Fowlerの2人のOTR
(写真①)によって1978年に開設されたCNSでは、目の前に
いる子供達のneedsに具体的にどう応えていくか、という現実
的な発想から、両親、教師、音楽療法士、言語療法士、理学
療法士、そして作業療法士が総合的なチームを組んで新しい
形体の仕事を試みています。その中核を成す共通理念は、子
供の行動を表面的な異常性から理解するのではなく、その背
景に潜む神経生理学的障害を把握、子供の発達を総合的に
捉えていこうとする感覚統合理論にあります。各々の専門家が
従来の固定的な仕事の枠組みを取りはずし、この革新的な試
みに挑戦していくのは決してたやすい事ではありません。以

下に当CNSのいくつかのプログラムを紹介してみます。

①Good Beginings:これは2~6才までの就学前の子
供達を対象としたプログラムで、朝9時から昼2時まで言語
発達や運動、情動面の問題を持った子供達の基礎的な発達を
促進するよう、感覚運動遊びを主体としたチームアプローチ
が組まれています。

②Developmental Day School:このプログラムは
教育委員会から正規の特殊教育プログラムとして認められて
おり、小学部、中等部、高等部と年毎に生徒数が増えてきて
います。生徒の大半が自閉傾向のある子供で占められており、
そのプログラムは普通の学校とは大分趣を異にしています。
それは、目的を認知や問題解決能力・コミュニケーション能
力の改善に置きながらもそれを主として感覚情報処理能力の
改善を通して行なおうとしているからです。クラスでは教師
対子供の比が1対1~2と非常に密で個別の言語、音楽、作
業療法も授業の中に組まれています。写真②は小学部の教室
の風景です。学校につきものと思われがちな机や椅子は部屋
の隅に置かれ、かわりに子供達にとって欠かせない感覚刺激
入力源である宙吊り遊具や触覚入力を意図した箱(左奥)が教
室でも大いに利用されます。又、写真③は高等部の様子です
が、手前の生徒は弾力包帯を頭や腕に巻いて触覚を得なが
ら、触覚を主とした活動に熱心に取り組んでいます。後の方



●写真1
中央がLorna Jean King, OTR FAOTA, 左がRolinda Fowler, OTR, 右が筆者



●写真2



●写真3

